

2175-A  
145号

同人雑誌編集部 〒108-8345 東京都港区三田2-15-14 慶応義塾大学内  
〒105-8565 東京都港区新田1-10-1 同人雑誌部

### 柳澤大悟

小田島比呂「葬祭」(「北の文学」第81号)は、冬の岩手北上を舞台に、一代で会社を興して地元で多大な影響力をもつ洋の臨終から本通夜と告別式の間の一日までを、孫である女子高生の未都を中心に書きます。未都の従兄で東京の大学に通っている研の、戦争から帰って会社を興した祖父を尊敬しつつも儀礼的なものに対して反感する姿や、洋が育てた里子の娘である中学生の世衣が人間の死体の顔に触れる瞬間が、抑制の利いた写生的な筆致で綴られます。雪に囲まれた家で展開する親族のやり取りは映像的であり、その解像度が非常に高い印象で、情緒的な膨らみを削った一定の文章のリズムが最後の花輪を数えながらの歩調に流れ込んでいくかのようでした。同じ場所に帰ってくるけれど、新しい体験を積み、想いや考えを巡らせ、数分前と同じ人間のままでではなくっているという確かな実感が、長い時間を生き抜いた老人と三人の若者という対比のなかで温かに滲みます。

続いて、大木青「むことり」(「樹林」1067)です。実の母から疎んじられている「わたし」は、父親の違う弟に食事とトイレ用のバケツの運搬をしてもらい、長屋の角部屋

の二階で暮らしています。母から打たれた頬の痣が変色していくなか、窓から見下ろせる路地に「猫捕り」の姿を見かけ、三度目の邂逅でようやく会話を交わせます。幼さを残した女の「猫捕り」は、毒で眠らせた猫を持ち帰り、血抜きをして売り払うのだと言い、「わたし」に薬の缶を譲ってくれますが、その甘い匂いが、かつて一緒に暮らしていたはずの姉やその姉を殴っていた実の父親の存在を記憶の底から蘇らせます。暴力を否定も肯定もせず、猫にも大人にも平等に作用する毒が用いられることで、弱い存在・強い存在という立場が不安定に揺らぎ、担う役割が循環する路地という場の濃密な暗さが立ち上がってきます。路地に集まってくるおばあちゃんたちの「つねに一定数が保たれる」という性質のように、キリのなさや回帰性が作品全体に漂うなか、出来事の表面をなぞっていくような「わたし」の眠差しに刹那的な儚さがありました。

木戸岳彦「意な裸」(「季刊作家」第96号)は、バス停から自宅までの帰宅途中に田んぼのなかの道で暴漢たちに襲われ、目が覚めたときには全裸になっていた「笠井光男」という中年男性が、置き去りにされた田んぼから帰ることに奮闘する様を書きます。家にいる中学生の娘のことを考え、また彼本人の自信のなさも相まって、通行人やパトカーに助けを求めるという一般的な解決策はすぐに消され、独特の優先度をもった思考により光男は更に複雑な状況に嵌まり込んでいきます。体に泥を塗ったり、栗山子の

### 加藤有佳織

大野瑞紀「片影に眠る」(「琳瑯」第四号)は、老女が「思い出す」ことによつて少女となる物語で、構成が秀逸です。語り手は祖母について考えています。語り手が小学生だったある夏、祖母は初めて「思い出す」ことをしました。「威圧的で、情景質な」祖父が亡くなって、「人生を楽しむはじめた」祖母は、やがて、語り手と「いくつもの年の離れていないおんなのこ」のようになります。アイスクリームと絵を描くことが好きな「ちよ」は、語り手が高校生するとき、「クレヨン鼻に突っ込んで寝た」まま亡くなります。少女になった祖母の「さらさらと真つ白くて、皮が余つてたるんでいる皮膚、そのぶよぶよさ」を、語り手はいま自分の腕に感じています。純白のワンピース、淡黄色のバニラアイス、カラフルなクレヨン。それらがつくる整った色彩の風景のなかで、老いるとはどのようなことなのかを「少女」の視点でとらえる語りには、少し融けたアイスクリームにスプーンがなめらかにめり込んでいくときのような感触があります。

木戸岳彦「意な裸」(「季刊作家」第96号)の語り手の笠井光男は、帰宅途中に襲われ、衣服も持ち物も奪われま

す。夜半に意識を取り戻すと、妻と娘と暮らす住宅団地が先に見える田んぼのなかにいました。あちこち殴られて痛む剣さししの身体を宥め、窮地を切り抜けようとして、朽ちた縄をあててみたり泥を塗つてみたりしながら、彼の思考は、職場、取引先の廃業、その社長の死、自分が小学生や中学生だったときのこと、娘の進路へと拡散していきます。太陽が輝く頃、「父親が全裸で帰宅する」という奇妙な一文を実践することになります。それは、彼には突飛に感じられた娘の進路希望と同じく、あり得ないことではなく、むしろ「あまたある可能性の中のちいさな一個にすぎない」のです。奔放に飛び広がるようであり、笠井光男という像を着実にむすぶ語りが際立っていて、中毒性のある作品でした。

城戸祐介「火葬まで」(「九州文学」第74号)冒頭、ドアも窓も閉め切ったアパートの一室で、田中という男性が宙に浮いています。「少なくとも一日は経つたともていい」と考え視線や四肢を動かそうとしますが、動きません。彼は、白蛇に似たロープを首に絡めて「自分で自分を殺した」のでした。肉体の生命活動が止まり意識のみになった田中自身が、宙吊りの遺体が発見され、警察が呼ばれ、司法解剖され、葬儀がとり行われるまでを語っていきます。目前の人々を即物的にとらえつつ、彼は社会や家族そして人生について思ひめぐらせます。思念のかたまりと呼ぶべき迫力のある文章で、自身を訪ねてくる者などいないと知

小説批評

服を借りようとしたりと、一見して正常な振る舞いから逸脱していく姿に感情移入は拒まれますが、泥や糞の匂いのなかで舞ってくる幼少期や青年期の苦く生々しい記憶に、胸を突かれるような懐かしさと痛みがありました。滑りさと悲哀が織り交さりながら、綱渡りのように炎天下で希望に辿り着き、目の前の世界が全裸のまま肯定されていく描写に思わず頬が弛みます。

次に、縣ひとみ「ロケの町」(『樹林』vol.69)です。総合科学技術高校に実習助手として勤務している「私」は、同じく助手で生徒からの人気がありながらも怠惰な仕事をする「北村晶子」に、芸能事務所へスカウトされるのが夢で、地元「西町銀天街」でロケをしてみたかったという話を聞かされます。夏休み中に激しい口論となり、晶子の「監視するのやめてください」という言葉がきっかけとなって、「私」が晶子の住むマンションまで帰宅のあとをつけていたことが明かされ、そして「西町銀天街」まで繰り出していく「私」の姿が書かれていきます。人物の異様なほどの肉感のなさが独特で、後半部からはどこか白昼夢めいていました。動機がすつぽりと抜けたまま欲望に突き動かされて移動する「私」は不気味なりアリアナイをまとい、恐怖感を巧妙に充訳したホラーのようでした。

続いて、城戸祐介「火葬まで」(『九州文學』第574号)です。アパートの自室の六畳間で、会社を解雇されたばかり

の「田中」という男は首を括りますが、死んだ肉体のなかで視覚・聴覚、そして意識は残され、窒息時に見開かれた目のまま周囲を眺めつつ、意識が早く消えることを望んでいます。自殺の前日に購入した奇妙な白いロープを首に絡めながら、解剖、葬儀と他者の手元に運ばれ、職業人や公務員の冷淡さや身勝手さ、そして時には真摯さに触れていきます。母親の面影と、重い響きで語られる「相国」が奥行きを持ち、思直な弱者であること、社会によって死へと追い込まれることを共有しながら、それらと繋がるようにする「田中」の強靱さが圧倒的でした。

従軍カメラマンとして赴いたベトナム戦争時のサイゴンで手の指二本を失った男性と、進路で母親と対立する女子高生の出会いが書かれた、藤原伸久「ミトコンドリア」(『文芸』134号)は、植物の知識に溢れた束の間の穏やかな時間に新たな紛争の影を受け入れていく男性の覚悟と諦観が読後にも残ります。森岡篤史「書虫」(『R&W』第29号)は、虫男(むしお)という珍しい名前をもつ男性の中学時代から三十代後半までを同級生の視点で書きます。市の公募キャラクターなど、どこかにありそうな話から個人的で静かな喪失へと至り、日常に潜んでいる毒が垣間見えます。「琳琅」第四号は全編が若々しく丁寧な筆致の作品で組まれ、特に、武村賢親「逍遙」、高條くるみ「海中毒空中毒」を面白く読みました。他に、飯田芳「破れ傘」(『じゅん文学』第104号)、時藤米三郎「幽霊」(『河』36号)が印象に残っています。

小説批評

りつつ、誰かに発見されることを待つ彼が、「他者に対する強い期待」を自覚する場面がとりわけ印象的でした。

葛渡由美子「聲」(『じゅん文学』第104号)の主人公の刀根風男は不意に「あんたね、いつ、借りを返してくれるんだ」という男の声を耳にします。父親から受け継いだ町工場の倒産したのは六年前のことで、借金はずべて返済したはずでした。「人生の大方に倦み、大方が終わっている」刀根は、どのような「借り」だろうかと自問します。二十数年前、結婚を控えていた小夜子という女性がいましたが、既婚であることを隠して自死しました。彼女とのあり得た暮らしを思うこともあります。従妹の娘の妊娠、工事現場での交通誘導の仕事、消息不明だった同級生との再会といった要素が組み合わさり、人生の「借り」を考える刀根の姿をさらっとした質感で描き出します。

井上聖朗「小春日和」(『ぶら』第4号)は、青いコートで羽織った男性をめぐる連作です。恋人が忘れた手袋を美術館のカフェへ探しに来た彼とカフェ店長、銀杏並木のうつくしい公園のベンチに居合わせた彼とサッカー少年。そして最終篇で、彼が公園で倒れ昏睡状態であると、恋人が後援に電話をします。瀟洒な雰囲気ですが、知らないうちに行き着いた切り傷のような痛みもあって惹かれる作品です。

縣ひとみ「ロケの町」(『樹林』vol.69)の語り手は総合科学技術高校で実習補助をしている女性です。一人で堅実に

仕事をしてきましたが、北村晶子が働くようになり、違和感が生まれます。「ふんわりきらきら」した晶子に語り手は奇立ちと関心を抱き、その住まいや出身地を訪ねていきます。晶子という人物に接近しようとする語り手の言葉には、温もりと不気味さが絶妙に入り混じります。

大市賢太郎「ムバカの一生」(『樹林』vol.67)は、アフリカ大陸東海岸の古くからの港町バガモヨに生きたムバカを描きます。孤独が当たり前であったムバカが、病院に勤める心優しいネエマに出会い、彼女のかたわらで暮らすようになります。最後には意外な仕掛けが明かされますが、詩情ゆたかな世界が魅力的でした。

渡邎里美「白いゴムまり」(『こみゆにてい』第109号)は、一九四七年の日暮異、敬しく何かをねだることなどできなかつた少女が、冒険をするようにゴムまりを買い、あつという間に失くした経緯を述懐する作品です。憧憬と喪失の結晶としてのゴムまりが存在感を放つとともに、語り手の詭々とした声に説得力がありました。

前木暁「彼岸花」(『素粒』第17号)では、九十歳の山田弥生が行方不明になり、消防団員を中心に捜索が始まります。彼女の孫である良介と、良介と同級であつた消防団員の勇一との会話をよく描いていました。



一月十二日、オンライン(2000)上にて、前号「三田文学」一四四号(一月九日発売)の合評会が行われた。織田作之助文学賞実行委員会から毎日新聞の濱弘明氏、受賞者の三浦貴真氏、学生創作セレクションに戯曲を寄せられた安藤瑞香氏、インカレポエトリ座談会から小池昌代氏、朝吹亮二氏、笠井裕之氏、水野小春氏を迎え、関根謙編集長、桑川麻里生副編集長、巽孝之編集顧問の他、編集部員二名が出席し、賑やかな会合となった。

一四四号の特集は「創作教室」。創作を教室で教えることは可能なのか――。圧倒的に学生の作品が多く収録され若い才能のきらめきが詰まった一冊となった。最初に織田作之助青春賞の受賞作「夜明珠」について、香港という難しい題材をひかひかの視覚的なイメージを用いて描き出すその瑞々しい感性を評価する声

が多く上がった。小池氏は作品の書き出しの流れるようなイメージを称賛し、三浦氏には選評の厳しい意見も併せ吞んでぜひ大きく育ってほしいと語った。

続いて桑川副編集長から三田文学主催の創作講座「文章と表現」について報告があった。対面授業が再開されない中「文章と表現」には従来を遥かに上回る数の生徒が集まり、「この授業だけが今年の生きがい」などの声が寄せられているという。桑川氏は「文章というものは今でも多くの人の心の支え、情熱の対象になりうるのだと文学の持つ力や魅力を改めて確認し励まされた」と語った。またこの講座から選出された学生創作セレクションの戯曲「汝、私以外を神としてはならぬ」はリアルで巧みなセリフ選びや痛快なストーリーが絶賛された。作者の安藤氏は浅草の木馬亭に喜劇を書き下ろすことが

決まっており、別の媒体に結びついて次の表現を生んでいく場所としての「三田文学」に大いに期待する意見が寄せられた。インカレポエトリからも若い人たちの創作が花開いていることが報告され、他人との出会いに触発され、変化してゆくことを受け容れながら創作することについて参加者の間で幅広く議論された。

詩については阿部日奈子氏の「春」が巻頭詩にふさわしい、ブーケを買ったような作品と好評で、エコーがかかったような感触を持つ詩「手首の海み」に現れる小織山という氏の独特の言語感覚も高く評価された。また最後に小説についても多彩な力作揃いだっただとの意見が出た。コロナ禍の中でつながり創作することを巡る意義深い討論となった今回の合評会は、充実した雰囲気のうち

に終了した。  
(編集部員 松村美里)

【今号の執筆者紹介】(五十音順・敬称略)

浅利誠(あさり まこと)

文筆家・翻訳家。元ポルドル・モンテリエ大学教授、一九四八年、青森市生まれ。著書に「非対称の文法」(文化科学高等研究院出版局)など、共訳書にKôji Karatani, Structure de l'histoire du monde, OZRS Editions など。

阿城(あろう、ゴロウ)

本名阿守権、一九〇七―一九六七。中国杭州出身。詩人・作家。大量の職務ルポルタージュを発表。詩集に「無弦琴」、小説に大作「南窓」、評論に「詩と理美」など。冤罪で獄死。

飯田悠理(いいた ゆり)

一九九九年、神奈川県生まれ。慶應義塾大学文学部卒。

池上貞子(いけがみ さだこ)

現代中国文学者。跡見学園女子大学名誉教授、一九四七年、埼玉県生まれ。著書に「黄の虻」(詩学社)「同班同学」(リール出版)「もうひとつの時の流れのなかで」(風潮社)「張琴玲 愛と生と文学」(東方書店)など。

いししんじ

作家、一九六六年、大阪府生まれ。著書に「夏ふみクローゼ」『海と山のピア』(共に新潮社)『且坐喫茶』(淡交社)『よはひ』(集英社)など。

伊勢康平(いせ こうへい)

一九九五年、京都府生まれ。翻訳にエク・ホイ「ヨーロッパのあとに、悲劇的なものをこえて」(ガクロンII)など。料理と宇宙技術「ガクロンII」を連載中。

大和田俊之(おおわた としゆき)

慶應義塾大学法学部教授、一九七〇年、東京都生まれ。著書に「アメリカ音楽史 ミンストレル・シヨウ・ブルースからヒップホップまで」(講談社)など。

岡田賢樹(おかだ ともき)

一九七二年生まれ、会社員、兵庫県在住。

小川利康(おがわ としやす)

中国文学者、早稲田大学商学術院教授、一九六三年、東京都生まれ。著書に「叛徒と烈士 周作人の一九二〇年」(平凡社)など。

巽孝之(さきよしの)

詩人、一九七五年生まれ。詩集に「さよなら、ほう、アクルわたしの水」(書肆山田、2019.02)など。

カズオ・イシグロ

一九五四年長崎生まれのイギリス作家。五歳の時にイギリスに渡る。一九八二年「運い山なみの光」が長篇デビュー作品。一九八九年「日の名残り」でブッカー賞受賞。二〇一七年ノーベル文学賞受賞。二〇一九年ナイト爵位を英王室より授与される。最新作は「クララとお日さま」(2021)。

加藤有佳織(かとう ゆかり)

慶應義塾大学文学部助教、一九八三年、神奈川県生まれ。著書に「現代アメリカ文学のブロン大盛」(書肆楓屋、二〇二〇年)、訳書にトミー・オレンジ「ゼアゼ乙」(五月書房新社、二〇二〇年)がある。

鎌田真二(かまた とうじ)

上智大学クリアケア研究所特任教授、京都大学名誉教授、一九五一年、徳島県生まれ。著書に「言葉の思想」(青土社)「日本人は死